

対談

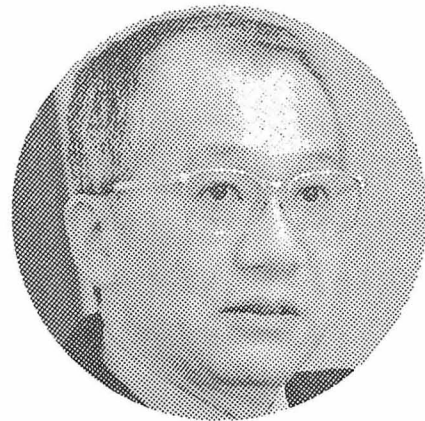
# こんな「大学」は潰れる。

「構造不況」に陥った大学の未来をめぐり、第一級の現場の研究者が率直に語り合う。



## 大沼保昭

おおぬま・やすあき (東京大学大学院教授)  
一九四六年生まれ。東京大学法学部卒業。専門は国際法。東京裁判やアジアに対する日本人の戦争責任の問題などに取り組み。女性のためのアジア平和国民基金理事。著書に『国際法―はじめて学ぶ人のための―』(東信堂)、『在日韓国・朝鮮人と人権』(編著、有斐閣)など多数。



## 橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう (東京工業大学大学院教授)  
一九四八年生まれ。社会学者。東京大学文学部卒業。同大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。フリーの執筆活動などを経て現職。専門は理論社会学、宗教社会学、現代社会論など。著書に『隣のチャイナ』(夏目書房)『書評のしごと』(海鳥社)など多数。

り、帯や扉、章の終わりにけらえいこ、榎村さとり、山科けいすけさんのマンガを入れるなど、工夫しました。勘違いの努力だというシビアな意見もあるけど、いろんな工夫があつていいと思う。

また、米国のハーバードとイエールのロースクールやプリンストン大学の公共政策大学院で過ごした時には、外部からの講師の招聘や学生による授業評価などに刺激を受けまし

た。自分のゼミや授業でも、作家、ジャーナリスト、弁護士、NGO、企業人、官僚など、学者以外の方々に招いて学生を挑発してもらうことを意識的にやってきました。そうした試みから、どれだけ学生が学び取ってくれたか、反応はさまざまですが。

橋爪 理工系の大学は、私どもの東工大もそうですが、大学院でも「ゼミ」という考え方がなくて、講義中心

## 社会との有機的なつながりの構築

大沼 少子化をはじめ、国立大学の独立行政法人化や法科大学院の設立など、大学自身も大学を取り巻く環境も激変しています。日本の将来を考える上で、大学教育をどのように再構築していくかという問題はきわめて重要だと思います。

橋爪 まったく同感です。

大沼 橋爪さんは、東工大が国立大学時代から朝日カルチャーセンターと提携して講座を企画するなど、いろいろな工夫をこらしておられる。いかにして質のよい教育を提供するかということを真剣に考えてこられたのではないかと。私も昨年度国際法の教科書を書きましたが、『国際法―はじめて学ぶ人のための―』、学生が手に取ってくれるように、表紙に安藤忠雄さんのデッサンを使った

なんです。必修科目が多くて、たとえばソフトウェアとかナノテクノロジーなど、そういう科目を順番にとらなくちゃいけない。そういう理工系の講義のほかに、学部向けの一般教養の授業があつて、その時間を私などが担当しているわけです。

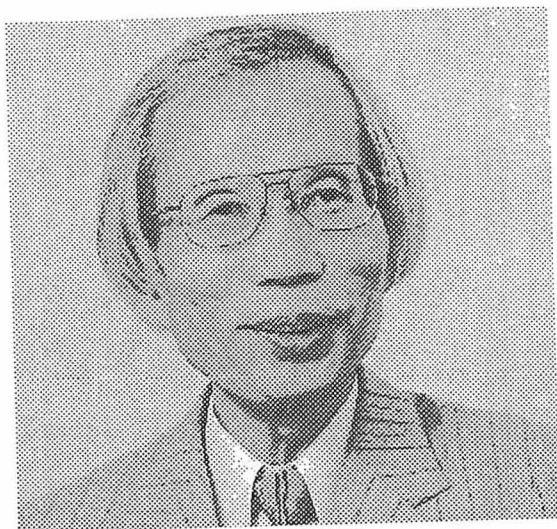
大沼 なるほど。

橋爪 そういう部分を担っている教員は一〇人から二〇人ぐらいしかいませんので、その人数であらゆるニーズをカバーできるはずもない。外部の講師を招くことが大事になります。そこでより低いコストで社会的な窓を開けるために、朝日カルチャーセンターと提携してみました。とりあえず有料にして、学生は安く聴ける、というシステムを始めたんです。

大沼 一種のアウトソーシング(外部委託)ですね。

橋爪 まあ、そういうことです。

大沼 学生の反応はいかがですか。



橋爪 まず、講師がどれだけすごい人かというのがよくわかっていない(笑)。でもそれなりの反応はあって、最初に吉本隆明<sup>たかあき</sup>さんのシンポジウムをやったときは大勢来ました。それでいまこのシステムを恒常化<sup>こうじょうか</sup>しようというところで、名称はおそらく「世界文明センター」といった名前になると思いますが、客員の先生などをお招きし、学生向けの授業やセミナーを夕方や土曜、休日にやって、場合によっては朝日カルチャーセンターで公開しようと考えているところです。

大沼 大学が社会との有機的<sup>ゆうきてき</sup>な結び付きをどうつくり上げていくか、一般の市民の方々に高度な文化、教育を提供していくか。これは、これからの大学のあり方を考える上でとても大事なことです。

橋爪 それが大学の社会的使命ですからね。

## 大学は「構造不況業種」

橋爪 話を日本の大学全体に移すと、注目すべきはまず大学進学率の高さだと思うんです。ここ二〇年は三五<sup>ぶ</sup>前後で頭打ちですが、子供の数が減っているので実情は定員のほうが多いのではと言われている。ということとは、ギリギリのところでは生を募集<sup>ぼしゅう</sup>できている大学がかなりあるということ、そういうところはちよつとした加減<sup>かへん</sup>で学生が集まらずに倒産<sup>とうさん</sup>ということになる。

それから、どの大学に行くかは受験指導で決まっています、それが行きすぎた結果、大学ごとに均質化<sup>きんしつか</sup>された学生が集まってくるという傾向にあるわけです。

大沼 偏差値<sup>へんさち</sup>で見事に切り分けられているということですね。

橋爪 そして、大学に入った時点が

ゴールですから、ポスト学業のモードに入っていく学生がかなりいる。そうすると、大学の四年間というのは何なのか、教育の基本的条件が成り立たない、というのが現状ではないかと思っています。

大沼 受験指導の徹底<sup>てつてい</sup>による大学間の序列関係<sup>じょれつ</sup>の成立と、受験勉強で精力を使い果たすことによる大学の遊園地化が生じたというのは、おっしゃるとおりだと思います。

それに対する社会的批判が高まり、大学の遊園地化をなんとかしなければならぬという大合唱が起こってきた。それを大学人もひしひしと感じていて、その危機感<sup>ききかん</sup>の戯画的<sup>ぎがてき</sup>な表れも現在みられる。つまり、どの大学でも、やれ学生のための「シラバス」(年間の講義計画)をつくれ、学生の授業評価をきっちりやれ、教材を前もって配<sup>くば</sup>れという形の学生(II「顧客<sup>こきゃく</sup>!」)サービスが教員

に求められていて、教授たちはほとんど研究時間がとれない。文部科学省が初等・中等教育でやっているような画一的<sup>かくいつてき</sup>な規律化が大学でも進行的<sup>しゅうてき</sup>にある。

大学の側に遊園地化を許<sup>ゆる</sup>してきたという事実があるのでやむをえない部分もあると思うが、このままでは日本の研究の将来がどうなってしまうのか、不安です。米国の大学はるかに授業料も高く、優秀な事務

組織と図書館職員を擁<sup>よう</sup>していて、教授たちがきめ細<sup>こま</sup>かな教育と研究ができるサポート体制<sup>たいし</sup>が整<sup>ととの</sup>っている。日本の場合、そうしたサポート体制がないまま、ひたすら米国の大学の一面をモデルにした学生サービスが求められている。その結果、教員が膨<sup>ぼう</sup>大な非学問的業務をこなさなければならなくなっている。今の学生の問題は家庭でも社会でも甘やかされて育てられていることなのに、大学まで「お客さま」扱い<sup>あつか</sup>で学生をスポイルしてしまっているのではないか。

橋爪 その背景<sup>はいけい</sup>を考えると、もちろん大学遊園地化に対する反動もあるのですが、もうひとつ、高すぎる大学進学率があると思うんです。これだけ進学率が高くなると、卒業しても大した仕事がない。ところが「大学に行くべきだ」という社会的合意があったこの数十年、学生の定員がすごく増えたわけです。そうすると

文科省の規定<sup>きてい</sup>で、教員の人数が増えますから、本来、社会的に必要とされる以上の大学教員が大勢生<sup>おおぜい</sup>まれてしまった。

で、大学遊園地化というのは、裏を返すと、そういう余剰教員を抱えた大学が経営体として健全であるか、いまの大学はたして社会的機能を果たしているのだろうか、という問題<sup>もんだい</sup>だと思うのです。

大沼 おっしゃるとおりですね。

橋爪 この問題は一定数の大学が潰<sup>つぶ</sup>れるまで、ずっと続くと思います。

しかし、そんな大学が潰れたとしても、優れた学者はいるところにはいるわけですから、そういう人たちにきちんとポストを提供してさえいれば、日本の学術にはそれほど影響はない。

大沼 私も大学、特に大学院の数は減ったほうがいいと思う。法科大学院にせよ、研究者養成の大学院にせ



よ、明らかに足りすぎ。大学院の教育、研究指導をやるだけの努力をしない教授がごまんといる。学生が可哀想です。

だから酷な言い方になりますが、今後しばらくは自由競争の結果として、法科大学院を含めて大学の選別が不可避的に起こるだろうし、それは甘受せざるをえないでしょうね。

橋爪 大学は、言ってみれば「構造不況業種」なんですね。社会的機能を果たしていないのに膨大な人的・経済的資源を使っている。

大沼 たしかに。

## 学費の問題を どう考えるか

橋爪 これを建て直すには、個々の大学のパフォーマンスを上げなければならぬ。そこで自由化、自由競争が必要になってくるわけですが、そこにはいくつかの問題があつて、

一つは国立大学と私立大学の問題です。国立大学は国から補助を受けていますから、これではハンディをつけて競争しろと言っているようなものです。

二番目は、それと関連しますが、学費の問題です。学生の教育にかかる経費は、学費よりだいぶ多いわけで、学費を上げないときちんとした教育はできない。ところが階層の再生産という問題があつて、これ以上学費が上がったとしてもじゃないが子供を大学にやれないという人が国民の大多数なわけです。そこで、学費を上げつつ階層差を生まないというシステムを創り出す必要がある。

大沼 国立大学と私立大学の問題はそのとおりだと思うのですが、学問的な業績や国際的な競争力の点からいうと力はあるんだけど、有名私立大学ほど知られていない地方の国立大学はかなりあります。大学を評

価するにあたってそういう大学にも目を向けていくことが、国民の側にも求められていると思いますね。

二番目の学費の問題。これは日本の将来を考えるうえで非常に重要な問題です。かつては、家は貧しくとも優秀な人材が授業料の安い国立大学に行つて、平等の地点からスタートして能力を発揮するという実力主義が働いていた。それが、明治以降日本がこれだけ急速な近代化、経済的発展ができたひとつの大きな理由だったわけです。

それが、現在ではたとえば東大生の父母の所得のほうが私立大生の父母の所得より高くなつてしまつていく。しかも日本の場合、米国に見られるような奨学金のシステムが十分に整っていないので、それを補填する仕組みもない。

橋爪 国立大学の授業料は、かつてはただみたいだったので、これ

は進学率が二・三割の時代なら機能するんですね。国が面倒をみて、彼らの活躍が回りまわって国民全体に戻ってくるわけですから。ところがこれが増えてきますと、その利益は本人に及ぶだけで、コストのわりに国民に戻ってくるものが少ない。いまは、所得の低い人たちからも税金を取りながら、一部の人のために、大学教育の経費を補填するという、逆再配分になっているんです。



大沼 おつしやるとおりです。

橋爪 だから奨学金の役割が大きい。奨学金は、一般企業に就職するのではなくて、大学に残つて新しい付加価値を生産し、社会に還元していく人たちに對して、学費や生活費を補填するという考え方でなければいけないんです。いまは人数が多すぎるし、条件が悪すぎます。もう少し絞つてもいいから、本当に優秀な人に十分な奨学金が与えられるようにすべきです。

大沼 奨学金のあり方にはいろんな意見があるでしょうが、それはまた別の機会に議論しましょう。

橋爪 三番目は「教育と研究」に対する考え方の問題です。私は、教育は現在の世代が利益を享受できるサービスだと思つて、受益者負担にしているし、そういう意味で学費は上げるべきだと思います。

それに対して研究は、将来世代に

利益が及ぶ、世代間の移転なんですね。いま私たちがいろんな利益を得ているのは五〇年前、一〇〇年前に研究された成果を応用しているものが多い。そうすると受益者負担というわけにはいかない。そこで私は国立、私立に関係なく、税金のうち国民の合意が得られる一定の割合を、優れた研究機関に分配すべきだと考えるわけです。

大沼 私も基本的にはそうあるべきだと思います。ただその際、忘れてはならないのは、研究水準を支えるための人的・物的なインフラ、とくに事務職と研究者のあいだにいる人たちの重要性です。たとえば図書館の職員であるとか、専門的な知識をもった研究補助的な人たちであるとか、そういう人たちの重要性が一般に理解されていない。教授たちの事務をこなしてくれる秘書も必要です。そういうところに資金を投入し

ていかなないと、今いわれたような将来世代の利益を確保していくシステムが機能しなくなるのではないか。橋爪 教員の数を減らしても、そういう人たちが増えれば、優秀な教員が教育・研究に専念できるので、全体のパフォーマンスははるかによくなるんですよ。

大沼 私はそういうかたちで大学を国際的な競争にさらされる経営体として見ていかないかぎり、かつての国立大学がかりうじて保っていた国際競争力さえ、失われていくのではないかと危惧しています。

遇は変わらない。これは変えていかないと。

橋爪 終身 身分は本当に優秀な教授に与えられるべきもので、全員に与えるものではないんです。官僚が天下るのはポストが三角形になっているからですが、官僚の天下り以上に非難されなければならないのは大学の人事で、大学の場合は長方形になっている、順番に教授になって居座っている。

大沼 それでもって貴重な国費を使っているわけですからね。

橋爪 大学というのは本来、学問的に切磋琢磨するところで、こんなアマアの人事システムでいいはずがない。

大沼 最後に大学のあるべき姿として、「市民、社会に開かれた大学」ということでいいですと、橋爪さんがなさっている朝日カルチャーセンターとの連携のような試みはとても

法学部の例でいいますと、法科大学院の設立や独立行政法人化などの機構改革と米国をモデルにした学生サービスの強化による行政事務が膨大に膨れ上がって、特に民法とか刑法といった国内法関係の方たちは気の毒なくらい研究時間がもてない。これはゆゆしき事態で、日本のトップクラスの法学関係の学者たちがこれだけ行政事務に時間をとられていると、将来それがボディブローとして効いてくるのではないか。それが怖い。橋爪 私はそれ自体、ほとんど必要のなかった労力じゃないかと思つて

大事なことだと思う。一般市民向けの公開講座や連続講演会、シンポジウムなどを大学の恒常的な業務としてもっと組み込んでいくべきではないか。一般市民がそういう形で大学から利益が得られれば税金の使い道として納得してくれるだろうし、寄付をしてやろうという気にもなるでしょう。大学教師の側も、もちろんこういう講義やシンポジウムをやる負担はたいへんですが、他方で学生だけでなく、一般市民と教育の形で接することで必ず得るものがあります。

日本人は学ぶことが好きで、生涯教育というのは二十一世紀の高齢化社会を豊かなものにしていくひとつの鍵だと思う。大学はその面でも大いに社会に貢献できるはずですよ。橋爪 大学は、授業をやっていないときは空っぽなんです。教室を含めて有効な資源がいっぱいあるの

いるんですけれどね。

## 社会に還元していく大学の使命

大沼 もうひとつ、日本の社会全体に通じる問題ですが、横並び主義、画一主義の弊害がある。今はどの大学の教授でも、年齢や在職年数によって給与から他の待遇までほとんどぜんぶ決まってしまう。どんなに素晴らしい教育や研究をやっている人でも、まともな論文を書いたこともなく授業で一〇年も二〇年も同じノートを読んでいる人でも(笑)、待

に、これを眠らせておくというのは本当にもつたいない。

入学試験とか学費とか、いろんな壁があるために、大学の知的サービスを受けたくても受けられない人がたくさんいて、膨大な潜在的な需要があるんですから、それを適切な対価で社会に還元していくのは、まさに大学の社会的使命ではないか。これは「おまけ」ではなく、大学の本質的な部分だと思ふんです。

大沼 そういう姿勢を持たないと前世紀の遺物的な存在になってしましますよ、大学は。

橋爪 大学は、それ以上の教育・研究機関はないという、最高学府なわけですから、そこで行われているのはいちばんすばらしいこと、いちばん奥深いことでなければならぬ。学生や大学人から見ても、市民から見てもそうでなければならぬんです。